

## パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して (XXII)

竹 下 春 日

### 19°《宗教の基礎と反論への回答》

〔一〕 宗教の基礎

〔I〕 宗教の基礎と証拠について。

(イ) 基礎と証拠——先づ始めに、パスカルにおける、宗教の《基礎》 *fondements* と、《証拠》 *preuves* との関係について、検討しておく必要がある。

(a) 両者は一般的に言って、一種の共通性を有する類似の概念であると、規定しうる。なぜなら、《基礎》とは、一定の主張・意見を成り立たしめる根拠であり、《証拠》も一定の結論たる意見を支持裏付ける一種の土台の役割を果たすものだからである。ところで、《証拠》は論証に係わるものであり、《基礎》は論証を含む広い領域にかんするものであるからして、前者は少くとも後者の一部を成すものと、言えよう。

(b) 『パンセ』における、両概念の上述のごとき共通性は、次の事実に見られる。すなわち、パスカルは彼の所謂《宗教の証拠》 *preuves de la religion* のうちに、《奇蹟》 *miracles* や《預言》 *prophéties* を数え上げているが (La. 38—Br. 290)、しかし断章 La. 469—Br. 588 のうちに、われわれは次の叙述を見出すのである——《われわれの宗教は賢くもあり愚かでもある。賢いというのは、それが最も知恵に富み、奇跡、預言などの上に最もかたく立てられているからである。》われわれは、この引用文により、キリスト教が《奇蹟、預言などの上に最もかたく立てられている》 *est fondée en mira-*

cles, prophéties, etc. ことを知るのであり、奇蹟・預言等が、まさにキリスト教の《基礎》 *fondements* であることを、理解するのである。それゆえわれわれは、《証拠》なるものは、パスカルにあっては、《基礎》に属するものであったことを、結論しうるのである。そしてこれら基礎と証拠こそは、パスカルによれば、われわれ人間の最大の光によって、知りえたところのものなのである——《人々が彼らの最大の光によって知りえたことを、この宗教はその子らに教えた。》 (La. 436—Br. 444)。

(二) 基礎の種類——《二つの基礎、一つは内的、他は外的。恩恵、奇蹟。どちらも超自然的。》 (La. 470—Br. 805 (227))。また La. 469—Br. 588 (226) 中にも、内外両基礎に相応する、《奇蹟、預言など》(外的)と《十字架》(内的)との別が、見られる。

(a) 内的基礎——パスカルがキリスト教の内的基礎と見做していたものは、人間の《墮落》 *la corruption* と《贖罪》 *la rédemption* であり、前者が人間の《悲惨》 *la misère* と関連し、後者が《十字架》 *la croix*, 《恩恵》 *la grâce*, 《あわれみ》 *la miséricorde* 等と密接な関係にあることは、言うまでもない。以下の諸断章は、このことを示すものである——La. 14—Br. 560 (14), La. 16—Br. 560 bis (16), La. 43—Br. 562 (21)。このうち主要なるものは、La. 14 中に見出される——《われわれがぜひとも知らなければならない重要なことは、次の点である。すなわち、われわれは悲惨であり、墮落し、神から離れてはいるが、イエス・キリストによって贖われていること、それについてわれわれは地上にすばらしい証拠を持っているということである。》

(b) 外的基礎——既に預言、奇蹟が外的基礎であることが上に示されたが、パスカルが《宗教の証拠》として掲げているものの多くが、——イエス・キリストやキリスト者の魂のあり方を除いて——外的基礎に所属するものである。これらを示す代表的なものは、次の二断章である——《宗教の証拠。／道德。教理。奇蹟。預言。表徴。》 La. 38—Br. 290 (26)), 《証拠。／1°かくも自然に反するのに、自力でかくも強固に、静かに確立したキリスト教の成立によ

って。／2°キリスト者の魂の聖潔，高尚，謙虚。／3°聖書の不思議。／4°特にイエス・キリスト。／5°特に使徒たち。／6°特にモーゼと預言者たち。／7°ユダヤ民族。／8°もろもろの預言。／9°永続性。他のどの宗教にも永遠性がない。／10°すべてのことを説明する教義。／11°この律法の聖きこと。／12°世界の動きによって。》(La. 459—Br. 289 (216))。以上の外，預言にかんするものとしては，La. 447—Br. 705，La. 654—Br. 704 (307) があり，また聖書の伝承にかんするものとして，La. 450—Br. 601，La. 445—Br. 645 の二断章が存する。

(c) 両基礎の体現としてのイエス・キリスト——イエス・キリストが神人の二重性を有するものであることは，次のパスカルの述べるところを俟つまでもなく明らかである——《教会は，イエス・キリストの人性を否認した人々に対して，彼が人であったことを示すのに，彼が神であったことを示すのと同等の苦勞をした。……》(La. 584—Br. 764)。この fr. は 28°《イエス・キリストの証拠》の章中のものであるが，本章にとっても重大な意義を有するものである。なぜなら，イエス・キリストが《homme》であるかぎりにおいて，彼は宗教の外的基礎であるが，しかしまた彼が《Dieu》であるかぎり，彼はキリスト教の最大の内的基礎に外ならないからである。それゆえ，《宗教の基礎》なる名称を章名中に含む本章において，イエス・キリスト来臨の秘義が多かれ少かれ触れられておることは，当然と言わねばならないのである——La. 430—Br. 570，La. 640—Br. 707 (293)，La. 440—Br. 796，La. 442—Br. 771，La. 448—Br. 765。イエス・キリストの来臨の意義については，La. 442 において明白に述べられている——《イエス・キリストが来臨されたのは，明らかに見える人を盲目にし，盲人の目を開き，病者を癒し，健康者を死なしめ，罪びとを悔い改めに導いて義とし，義人を罪のうちにおらしめ，貧者を満たし，富者をむなしくするためである。》

## 〔II〕 光と闇（啓蒙と盲目）について。

神の人間に対する基本的態度を示すものとして，啓蒙と盲目が存する。この根本的事実は，次の諸断章において，詳細に説かれている——La. 432—Br.

789, La. 433—Br. 528, La. 441—Br. 581, La. 443—B8. 578, La. 444—Br. 795, La. 321—Br. 575 (173)。これらのうち主なるものは、断章 La. 443 である——《盲目にする。開眼する。聖アウグスティヌス、モンテーニュ、スポン。／選ばれた人々を照らすには十分な光があり、彼らをへりくだらせるには十分な暗さがある。見捨てられた人々を盲目にするには十分な暗さがあり、彼らを罪に定め、言いのがれさせないためには十分な光がある。／旧約聖書におけるイエス・キリストの系図は、他の多くの無用なもののあいだに混じって見分けにくいまでになっている。もしモーセがイエス・キリストの祖先だけを記録していたら、それはあまりに明確であったろう。もし彼がイエス・キリストの系図をしるさなかったならば、それはあまりに不明確であったろう。だが結局、こまかく見る人は、イエス・キリストの系図がタマル、ルツその他によって十分見分けられることを知りうる。……》

〔III〕 隠れた神。

なぜ神は或る人々に光をもたらし、他の人々を盲目にするのであろうか。これに対する一応の答えとしては、それは神が《隠れた神》 Dieu caché だからとするのが、パスカルの一貫して説くところである。

(一) 父なる神としての《Dieu caché》——《神が、ある人々を盲目にし、他の人々を啓蒙しようとしたということを、原則として認めないかぎり、人は神の御業を何事も理解しない。》 (La. 439—Br. 556), 《神がみずからを隠そうとされたこと。もし一つの宗教しかなかったならば、神はそのうちに明らかにお現われになるであろう。／もしわれわれの宗教にしか殉教者がなかったならば、同様であろう。／神はこのように隠れているので、神が隠れていることを説かない宗教は、すべて真ではない。またその理由を明らかにしない宗教も、すべて有益ではない。われわれの宗教は、それらをことごとく果たしている。〈まことにあなたは隠れている神である〉》 (La. 449—Br. 585)。

(二) 子たる神としての《Dieu caché》——《預言者たちは、イエス・キリストについて何と言っているか。彼はあらわに神であるとか。いな、彼は真に隠れた神である、……》 (La. 435—Br. 751)。

〔二〕 反論への回答

〔I〕 キリスト教における不可解・不分明・反常識的なもの一般への批判に対する回答。——《すべて不可解なものは、それでも依然として存在する。》(La. 437—Br. 430 bis), 《偉大。この宗教はじつに偉大なものである。だから、それが不分明であるとしたら、それをたずねるだけの労をとろうとしないものは、それ(宗教)をとりあげられるのが当然である。この宗教は求めることによって見いだされるものであるとしたら、それをつぶやくことがあろうか。》(La. 320—Br. 574 (172))。

〔II〕 奇蹟に対する反論への回答。——(一) 奇蹟一般について (La. 473—Br. 815 (230), La. 474—Br. 263 (231), La. 475—Br. 833 (232), La. 477—Br. 817 (234), La. 478—Br. 813 (235))。このうち一つを代表例として選ぶならば、La. 477 を指摘しうる——《……人が妙薬を持っていると称する多くの虚言者どもに多大の信頼をよせ、ときにはその生命を彼らの手にゆだねるまでになるのは、なぜであろうかと考えて、私が気づいたのは、真正の薬があることがその原因であるということであった。なぜなら、本物がなかったなら、そんなに多くの偽物はありえないだろうし、また偽物をそんなに信用することもありえないであろうからである。……したがって、世には偽りの奇蹟がたくさんあるから、真のものはないと結論しないで、反対に偽りの奇蹟が多くある以上、真のものがあるのは確かであり、真のものがあるからこそ偽りのものもあるのだと言わなければならない。》(La. 477)。

(二) 奇蹟の具体例——復活・処女降誕 (La. 434—Br. 223, La. 471—Br. 222 (228))。

〔III〕 聖書にかんして——(一) 聖書の誤解から生ずる反論への回答——《抗議。明らかに聖書には聖霊の口述しなかった事が満ちている。／答。だからといって、それらの事柄は信仰の害にはならない。云々》(La. 464—Br. 568 (221))。

(二) 聖書の字句の濫用への批判——《聖書の章句を濫用し、自分の誤りを支えてくれそうに見える章句も見いだして得意になる人々に対して。——受難

週日旺日、晩禱の章。王のための祈禱。……》(La. 465—Br. 899 (240)),  
《「メム」は秘義的だなどと、私は言わない。》(La. 515—Br. 688 (240))。

〔IV〕 多数の宗教の存在を理由根拠とする、キリスト教への懐疑に対して——La. 419—Br. 589 (200), La. 425—Br. 590 (204), La. 477—Br. 817 (234) の終りの部分。このうち最後の断章の終りの部分は、前出の引用文（〔II〕の(一)参照）に直結する部分であり、これは次の如くである——《宗教についても同様に推論すべきである。真の宗教がなかったならば、人が偽りの宗教を多く考え出すことはありえなかったであろうからである。……》(La. 477)。

〔V〕 宗教的真理の総合性の認識欠如に対する批判——La. 454—Br. 201 (211), La. 455—Br. 863 (212), La. 460—Br. 567 (217), La. 462—Br. 862 (219)。これらのうち La. 454 で、パスカルは、次の如く述べている——《一方の人たちの反論も、他方の人たちのそれも、彼ら自身に対してだけ有効で、宗教に対しては有効ではない。……》

〔VI〕 救いを望む人は、地獄に対する恐れがあるという異論への回答——《回答。地獄を恐れる理由をいっそう多く持っているのはだれだろう。地獄があるかどうか知らず、もしあった場合には、そこに落ちるにきまっている人か。それとも、地獄があるということをおもな程度納得して、もしあった場合には、救われる希望を持っている人か。》(La. 349—Br. 239 (184))。

〔VII〕 宗教的環境の影響を根拠とするキリスト教否定に対する回答——《……キリスト教のうちに何か驚くべきものがあるということは認めなければならない。「それは君がそのなかで生まれたからだ」と言う人があるかもしれない。……私はそういう理由があればこそ、その先入見に誘われはしないかと、大いに警戒しているのだ。しかし、自分がそのなかで生まれたにせよ、それが驚くべきものであることは認めずにはいられない。》(La. 23—Br. 191(23))。

〔VIII〕 神と人間本性にかんする無知から生ずる懐疑への回答——(La. 446—Br. 510, La. 98—Br. 390 (46), La. 379—Br. 604 (192))。これらの fr. のうち、La. 446 を具体例として掲げると、次のようである——《人間

は神にふさわしいものではない。しかし、ふさわしくなりえないものでもない。／神が惨めな人間のなかに加わるのは、神にふさわしいことではない。しかし、人間をその惨めさから引き出すのは、神にふさわしくないことではない。》

[IX] 宗教的《心情》の欠如者への批評—— La. 21—Br. 196 (21)。

[X] 宗教的光明の否定にかんするもの——《無神論者たちの反論。／「だが、われわれには何の光もないのだ」》 (La. 451—Br. 228)。この断章中には、パスカルの回答は直接には見られない。しかし La. 12—Br. 195 (12) 中に、これに相当するものが、詳述されている。

[XI] 宗教を嘲ける者への回答——《そこで、むこうは相手をあざけるだろうか。／あざけてもいいはずなのは、どっちなのだ。それなのに、こっちは、相手をあざけらず、むしろ相手に同情している。》 (La. 23—Br. 191 (23))。なおこの断章をより良く理解するためには、11°《始め》の章中の La. 332—Br. 190 を参照のこと。

[XII] 宗教的問題意識の欠如および宗教的無関心について——La. 10—Br. 197 (10), La. 468—Br. 217 (225)。La. 10 は、宗教的に無関心な人々の価値判断の様相について述べ、La. 468 はキリスト教会、旧約・新約を、それぞれ《自己の家》、《権利証書》に喩えて、キリスト教への回心を促している。

[XIII] 以上の諸点 ([I]～[XII]) のうちの若干を兼具した不信仰に対する批判—— La. 15—Br. 194 bis (15)。

[XIV] 異教徒・無信仰者に対するイエス・キリストの位置の図示——La. 588—Br. 591 (270)。

[XV] 宗教の証拠への移行——以上における宗教の基礎とこれに対する反論への回答は、広義におけるキリスト教の証拠と言うべきものであるが、最後にパスカルは、宗教に対する無関心への批判と教導に即して、宗教の狭義の証拠 (次章以下) へと移行すべき意図と態度とを示している—— La. 12—Br. 195 (12), La. 11—Br. 194 (11)。

20°《キリスト教の道德》

[I] 神の業について——キリスト教道德の最大の基礎は、言うまでもなく、神の存在とその業である。これについては、パスカルによって非常にしばしば説かれているが、本章にあってもそのテーマの性質上、当然乍ら筆が費されている——La. 668—Br. 526, La. 671—Br. 767, La. 695—Br. 579 (320), La. 708—Br. 507 (333) の諸断章が、これである。《……神の子が人となられたことは、人間が必要とした救いの偉大さによって、人間の悲惨というものの大いさを、人に示している。》(La. 688), 《彼 [キリスト] は、隣人を愛するけれども、彼の愛は、その範囲内にとどまらず、彼の敵におよび、ついで神の敵にまでおよぶ。》(La. 671), 《神 (と使徒たちと) は、高慢の種が異端を生じさせることを予見し、その異端が自分自身のことばから生じる場合を防ごうとして、聖書と教会の祈禱書とのうちに相反する語と種とをおき、それらが時に応じて実を結ぶようにされた。／同様に、神は道德のうちに愛を与え、それが邪欲に敵して実を結ぶようにされた。》(La. 695), 《恩恵。恩恵のはたらき、かたくなな心、外的事情。》(La. 507—XV 回の (333) 参照)。

[II] 自己否定と、神への愛および神によって救われた状態について——次の諸断章は、自己否定と神への愛とによって、われわれ人間が神の恩寵にあづかり、悲惨の状態から救済されることを示すものである (XV 回の (321) 参照) ——La. 689—Br. 476, La. 696—Br. 458 (321), La. 698—Br. 779 (323), La. 699—Br. 485 (324), La. 720—Br. 459 (345), La. 721—Br. 460 (346)。

以上の諸断章のうち、代表的なるもの二つを掲げると、次の如くである——《「すべて世にあるものは、肉の欲、目の欲、生命の誇りである。〈官能欲、知識欲、支配欲〉」災いなのは、これらの三つの火の川が、うるおしているというよりも燃えたっている呪われた地上である。さいわいなのは、それらの川の上で、沈まず、巻き込まれず、泰然として動かず、しかも、それらの川の上



で、立ちもせず、低い安全な場所にすわっている人々である。彼らは光がさすまで、そこから立ち上がらず、そこで安らかに休息したのち、やがて彼らを引き上げて聖なるエルサレムの城門にしっかりと立たせてくださるかたに、その手をさしのべる。……彼らは涙を流す。それはすべての滅びるべきものが激流に巻き込まれて過ぎ去るのを見てではない。その長い流離の日のあいだ、たえず慕いつづけてきた彼らの愛する故国、天のエルサレムをなつかしんでである。》(La. 696), 《真の唯一の徳は、それゆえに、自分を憎むこと(なぜなら、人はその邪欲のゆえに憎むべきものであるから)と、真に愛すべき存在を愛するために、それを求めることである。しかし、われわれは自分の外にあるものを愛することはできないので、われわれのうちにあつて、しかもわれわれでない存在を愛しなければならない。このことは全人類の一人一人について真実である。ところで、そのようなものは普遍的存在のほかにはない。神の国はわれわれのうちにある。普遍的な善は、われわれのうちにあつて、われわれ自身であり、しかもわれわれではないものである。》(La. 699)。

自己否定と神への愛と神の恩恵の享受との三者を保持する、すべてのキリスト者たちは、この三者の共有を根拠として、自ずから宗教的理想的共同体の成立に参加する。これが即ちパスカルの所謂《イエス・キリストの肢体》*membre de Jésus-Christ* (La. 668) である。

[III] 《肢体》について——パスカルは、《肢体》なるものについて、様々に叙述している——La. 676—Br. 482, La. 684—Br. 474, La. 686—Br. 480, La. 687—Br. 473, La. 688—Br. 483, La. 689—Br. 476, La. 690—Br. 475。断章 La. 688 は、以上のうちの代表である——《肢体であるということは、全体の精神によってのみ、また全体のためにのみ、生命と存在と運動とを持つことである。肢体が分離して、その属している全体をもはや顧みないならば、それは滅びゆき死にゆく存在にすぎない。……しかし、全体を愛することは、自分を愛することである。というのは、肢体は全体にあつて、全体によって、全体のためにのみ存在しているからである。……／＼神につけば、一つの霊になる》人はイエス・キリストの肢体であるから、イエス・キリスト

を愛する、三位一体のように、全体は一つであり、一つは全体のうちにある。》

[IV] 宗教的実践内容の細目と指針——(1) 自己を憎み、神に似ることを願うべきこと (La. 667—Br. 537)。(2) 自己の卑しさと清浄との自覚のすすめ (La. 669—Br. 529)。(3) 恩恵の二重の可能性の教示 (La. 670—Br. 524)。(4) 形式主義の否定——(a) 律法主義の克服 (La. 683—Br. 672, La. 692—Br. 484)。(b) 国法を超越すること (La. 685—Br. 611)。(c) 悔悛の秘跡に囚われないこと (La. 709—Br. 923 (234))。(d) 聖パウロの結婚にかんする所言について (La. 718—Br. 673(343))。(5) 快樂の本体にかんする教訓 (La. 677—Br. 209)——この断章中には、「快樂」なる語は出ていないが、文中の《おまえの主人》 ton maître を、ブランシュヴィック説に従って、「快樂」と解する。(Voir Pensées et opuscules (Éd. Brunshvicg), p. 428, note 3)。(6) 我意の否定による不満足の解消 (La. 678—Br. 472)。(7) 邪欲と不安に対する処置法 (La. 679—Br. 914)。(8) 形式的なもの(外的なもの)と迷信および高慢の関係についての教示 (La. 680—Br. 249, La. 722—Br. 250 (347))。(9) 情念を使役すべきこと (La. 701—Br. 502 (326))。(10) 自分の義務を思い出すべき方法 (La. 723—Br. 104 (348))。(11) 欠点を指摘してくれる人に対して感謝すべきこと (La. 693—Br. 535 (318))。(12) 隠れた善行のすすめ (La. 703—Br. 159 (328))。(13) 善をもって悪に打ち克つべきこと (La. 704—Br. 911 (329))。

[V] 真のキリスト者について——《真のキリスト者ほど幸福で、道理にかなない、有徳で、愛すべきものは、ほかに無い。》 (La. 673—Br. 541), 《キリスト者は、自分が神に結ばれていると信じていながら、いかに高慢でないことか。自分をみみずくに比べていながら、いかに卑屈でないことか! 生と死と、幸と不幸とを受けるなんという麗しい態度。》 (La. 674—Br. 538)。

[VI] 真のキリスト教徒のあり方と、然らざる者のあり方との対比および批判——(1) 兵士と修道士 (La. 672—Br. 536)。(2) 殉教者と異教徒 (La. 675—Br. 481)。(3) 信仰と善行のちがひ (La. 681—Br. 496)。(4) 各宗教中の二種類の人々 (La. 682—Br. 747 ter)。(5) キリスト

者と哲学者のちがい (La. 691—Br. 503)。(6) よい恐れと悪い恐れ (La. 351—Br. 262 (186))。(7) 神に選ばれた者と捨てられた者 (La. 697—Br. 515 (322))。(8) 義人と罪人 (La. 700—Br. 534 (325))。(9) 世俗生活と信仰生活 (La. 705—Br. 906 (330))。(10) キリスト者と反キリスト者 (La. 719—Br. 533 (344))。(11) 世俗的クリスチャンへの批判 (La. 702—Br. 495 (327)), La. 715—Br. 497 (340))。(12) 生活の良否を判定すべき規準点について (La. 706—Br. 383 (331))。

[VII] 世俗的生活・思考・事物を対象とする、教導と批判——(1) 善悪の二語についての理解 (La. 694—Br. 500 (319))。(2) 道徳と言語の一般性 (La. 710—Br. 912 (335))。(3) 徳の測り方 (La. 711—Br. 352 (336))。(4) 善悪の行為に対する評価の二段階 (La. 712—Br. 501 (337))。(5) 演劇の危険性 (La. 713—Br. 11 (338))。(6) 《教養人》honnête hommeへの批判 (La. 716—Br. 68 (341), La. 726—Br. 542 (351))。

(XXII 回了)